

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530631
 研究課題名（和文） キレやすい児童生徒の母子関係とその支援の在り方に関する実証的研究
 研究課題名（英文） Empirical study on supporting a mother and a child who loses Self-control
 研究代表者 藤井 義久（FUJII YOSHIHISA）
 岩手県立大学・共通教育センター・准教授
 研究者番号：60305258

研究成果の概要（和文）：

欲求不満傾向の強い児童生徒ほどキレやすい傾向が見られる。そのようなキレやすい児童生徒を生み出しやすい母子関係は国によって異なっており、日本においては特に母親の愛情不足が、北欧諸国においては特に母親によって自分の自由が束縛されることがキレやすい児童生徒を生み出す大きな原因になっていることがわかった。そして、キレやすい子供に特徴的な甲高い声に反応してキレやすい母親が多く、そのような母親は特に外部に対して様々な子育て支援を求めていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

Children with strong frustrations may easily lose their self-control. National differences in the type of mother-child relationships that result in anger prone children have been identified. For example, it is known that insufficient maternal love is the major cause of anger in Japanese children. Conversely, in Nordic countries, a mother restraining a child's freedom is the major reason for anger. And many mothers lose their self-control when hearing the high-pitched voices of their children, which is known to be a characteristic of anger prone people. It is known that such mothers tend to demand child-rearing support.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：キレやすさ、母子関係、欲求不満、虐待、子育て支援

1. 研究開始当初の背景

(1)文部科学省(2006)によると、2005年度、公立の小学校内で児童が起した暴力行為の件数は、前年度より6.8%増の2018件で、統計を取り始めた1997年度以降、

過去最多であり、対教師暴力の増加率は、ここ3年連続で30%を超えていることから、学校においてキレやすい児童生徒数は増加してきていると考えられる。

- (2) 子供は、一般に不適切な養育環境の中で育つと情緒発達が困難になるという Winnicott(1965)の研究や、親からの愛情不足や家庭におけるストレスが脳の機能に影響を与え情動の制御に困難をもたらすという高田(1996)や Schore(2001)の研究から、幼少期の親子関係が、後の子供の情緒発達に少なからず影響を及ぼしていることがわかってきた。しかしながら、こういった親子関係の中で生活し続けると、よりキレやすい児童生徒になるかまでは分析が行われていない。
- (3) デンマークやスウェーデンといった北欧諸国では、産・官・学及び家庭が連携して児童生徒の健全な成長を見守っていく体制が出来上がっており、日本のような児童虐待を初めとする親子を巡る問題やキレやすい児童生徒の問題はそれほど深刻化していない状況である。

2. 研究の目的

- (1) 児童生徒は、母親に対してどのような欲求不満を感じているかについて明らかにする。
- (2) 児童生徒は、母親に対してどういった不満が強まるとキレやすくなるかについて明らかにする。
- (3) 子育て中においてキレやすい母親を生み出す原因について明らかにし、そうしたキレやすい母親が児童生徒の心の発達に及ぼす影響について検討する。
- (4) キレやすい児童生徒及びその母親に対する望ましい支援の在り方を検討する。

3. 研究の方法

(1) 欲求不満とキレやすさの関連性の検討

① 調査対象

日本の公立中学校に在籍している中学1年生～3年生 553名(男子 277名、女子 276名)

② 調査手続

担任が、授業時間中、新たに開発した「中学生版キレやすさ尺度(20項目)」及び欲求不満に関する調査を前述の調査対象者に配布し、一斉に回答を求めた。

③ 分析手続

項目分析及び主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い、「中学生版欲求不満尺度」を開発するとともに、パス解析によって欲求不満とキレやすさとの関連性について分析した。

(2) キレやすい児童生徒の母子関係に関する国際比較調査

① 調査対象

日本、デンマーク、フィンランド、スウェーデンに住む児童生徒(10歳～15歳)計 1851名(男子 897名、女子 954名)。国別調査対

象者数は、日本 941名(男子 475名、女子 466名)、デンマーク 446名(男子 201名、女子 245名)、フィンランド 281名(男子 129名、女子 152名)、スウェーデン 183名(男子 92名、女子 91名)である。なお、児童生徒の人権保護の観点から国によって調査協力対象者数にバラツキが見られたので、本分析においては、各国ごとの比較はせず、デンマーク、フィンランド、スウェーデンをまとめて北欧諸国とし、日本と北欧諸国の児童生徒の比較という形で分析を行うことにした。

② 調査手続

担任が、保護者の同意を得られた前述の調査対象者に対して、「キレやすい場面リスト」及び「母親に対する不満リスト」から成る質問紙を配布し、一斉に回答を求めた。

③ 分析手続

項目分析及び主因子法・プロマックス回転による因子分析によって「国際版キレやすさ尺度」及び「国際版母親不満尺度」を開発し、二要因分散分析によって各得点の属性別差異について検討するとともに、パス解析によって、児童生徒のキレやすさと母親に対する不満度との関連性について分析した。

(3) キレやすい母親の実態及びその支援の在り方に関する調査

① 調査対象

現在、子育て中の母親 600名に実施し、最終的に回答があった 273名を対象に調査を実施した。

② 調査手続

調査協力校の児童生徒を通じて調査用紙を母親に配布し、一定期間後に児童生徒を通じて担任経由で回収する留置法によって調査が実施された。

③ 分析手続

項目分析及び主因子法・プロマックス回転による因子分析によって「母親版子育て怒り尺度」、「母親版子育て支援欲求尺度」を開発し、それらの尺度を用いて、分散分析、重回帰分析、パス解析などにより、キレやすい母親の実態及び問題対処行動、求めている支援形態など検討した。

4. 研究成果

(1) 生徒版欲求不満尺度(FSS)の開発

項目分析及び主因子法バリマックス回転の結果、「安心・安全欲求」(「学校が怖いと感じることがある」など7項目)、「自己実現欲求」(「自分の夢を叶えるのは難しそうだ」など6項目)、「承認欲求」(「先生に私の良い所を認めてほしい」など3項目)、「生理的欲求」(「もっとおいしい物を食べたい」など3項目)、「休息欲求」(「もっとゆっくりしたい」など3項目)、「親和欲求」(「友達ともっと仲良くなりたい」など3項目)という6つの下位尺度、計 25項目から成る「生徒版欲求不

満尺度」(Frustration Scale for Students, FSS)を開発した。なお、各下位尺度ごとのクローンバックの α 係数は、.85~.88という値を得たことから、本尺度には、一定の信頼性が備わっていることが確認された。そして、生徒の欲求不満度は、各下位尺度を構成している項目得点を単純に加算する形で算出した。表1に、FSSの各下位尺度ごとの男女別平均値、標準偏差を示す。

表1 FSSの下位尺度ごとの平均値、標準偏差及び性差

下位尺度	男子	女子	t
安心・安全欲求	3.97(3.87)	6.38(4.04)	7.50***
自己実現欲求	8.00(4.58)	10.79(4.11)	7.90***
承認欲求	1.72(2.01)	2.46(2.15)	4.36***
生理的欲求	3.06(2.54)	3.33(2.28)	n. s.
休息欲求	5.74(2.78)	6.89(2.22)	5.64***
親和欲求	1.74(1.99)	2.16(1.85)	2.60**
欲求不満得点	24.23(13.00)	32.01(12.00)	7.66***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, () SD

表1の通り、「生理的欲求」を除いて、一般に女子の方が男子よりも有意に欲求不満の強いことがわかった。また、6つの欲求不満のうち、現代の青少年は、自分の夢がなかなか実現できないことに対して特に不満を強く感じていることが明らかになった。

(2) 青少年の欲求不満とキレやすさの関連性

青少年の欲求不満とキレやすさの関連性について一要因分散分析によって検討した。なお、調査対象者をFSSによって算出された欲求不満得点によって3群(L群:20点以下、M群:21点~30点、H群:31点以上)に分けた。その結果、表2の通り、青少年の欲求不満とキレやすさ傾向とは、密接に関連していることがわかった。

表2 欲求不満とキレやすさの関連性

キレやすさ傾向	欲求不満傾向			F
	L群 180名	M群 181名	H群 192名	
友達への怒り	6.39 (3.67)	7.50 (2.85)	9.49 (2.58)	44.63***
親への怒り	6.60 (4.15)	8.06 (3.40)	9.52 (2.98)	27.95***
自分への怒り	4.48 (3.14)	6.14 (2.83)	7.71 (2.90)	47.07***
教師への怒り	5.79 (3.99)	6.46 (3.54)	8.49 (3.40)	25.38***

()SD, *** $p < .001$

さらに、キレやすさ得点を目的変数、欲求不満得点を説明変数とし、パス解析を行い、欲求不満とキレやすさとの関連性について検討した。その結果を図1に示す。

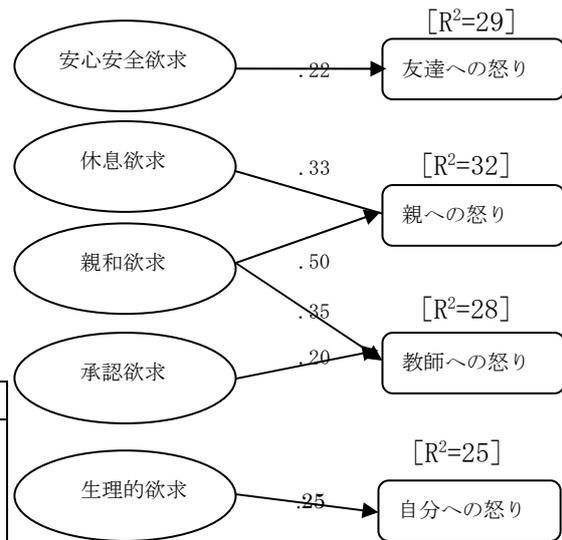


図1 パス解析結果

図1の数値は、パス係数(標準偏回帰係数)である。パス解析の結果、特に「家庭ではゆっくりしたい」といった休息欲求や「仲の良い友達を作りたい」といった親和欲求に関わる不満が強まるほど親に対してキレやすくなることが明らかになった。

(3) 児童生徒のキレやすさに関する国際比較

日本のみならず、北欧諸国の児童生徒も対象にして、キレやすい児童生徒の実態に関する国際比較調査を実施した。その結果を表3に示す。

表3 性別×国別ごとのキレやすさ得点の平均値、標準偏差及び分散分析結果

下位尺度	男子	女子	分散分析結果		
			性別	地域	交互作用
友達	7.46 (3.48)	8.76 (3.48)	119.62*** (男<女)	19.37*** (日>北)	8.39**
	6.47 (2.87)	8.35 (2.70)			
	7.12 (3.83)	8.18 (3.56)	23.77*** (男<女)	n. s.	4.09*
親	7.18 (3.00)	7.65 (2.79)			
	5.56 (3.36)	6.38 (3.22)	31.09*** (男<女)	18.07*** (日<北)	n. s.
	6.19 (3.16)	6.98 (3.11)			
自分	6.18 (3.97)	7.38 (3.78)	20.82*** (男<女)	n. s.	n. s.
	6.43 (3.40)	6.77 (3.32)			

1) *** $p < .001$

2) 上段が日本、下段が北欧諸国である。

表3に示す通り、国際版キレやすさ尺度の各下位尺度（性×国）について分散分析を行ったところ、国を超えて一貫して女子の方がキレやすい一方で、国によってキレる原因となる怒りの方法性に違いが見られることがわかった。すなわち、日本の児童生徒は友達に対してよりキレやすいのに対して、北欧諸国の児童生徒は自分自身に対してよりキレやすいといったように内に怒りが向きやすい傾向が見られた。

(4) キレやすい児童生徒の母子関係に関する国際比較

キレやすい児童生徒の母子関係について、母親への不満の視点から検討するために、項目分析及び主因子法・プロマックス回転による因子分析によって「国際版母親不満尺度」を開発し、児童生徒が抱えている母親への不満は、大きく「虐待傾向」、「自由束縛傾向」、「愛情不足傾向」という3つの因子で説明できることが判明した。そこで、それら3つの因子に基づいて、日本のみならず、北欧諸国の児童生徒をも対象にして、児童生徒が抱えている母親への不満傾向について国際比較を行った。その結果、表4の通り、母親への不満は、国を超えて一貫して女子の方が強いこと、日本は母親によって自由が束縛されていることに対してより不満を感じているのに対して北欧は母親からの愛情不足に対してより不満を感じる傾向の強いことなどについて明らかにした。

表4 性別×国別ごとの母親不満得点の平均値、標準偏差及び分散分析結果

下位尺度	男子	女子	分散分析結果		
			性別	地域	交互作用
虐待傾向	2.25 (3.00)	2.72 (3.03)	9.29** (男<女)	n. s.	n. s.
	2.49 (2.72)	2.82 (2.74)			
自由束縛	7.80 (3.88)	8.92 (3.46)	21.20*** (男<女)	17.63*** (日>北)	8.50**
	7.55 (2.85)	7.87 (2.72)			
愛情不足	2.40 (2.56)	3.62 (3.03)	64.66*** (男<女)	13.40*** (日<北)	n. s.
	3.06 (2.36)	3.80 (2.65)			
全体	12.45 (7.57)	15.26 (7.69)	41.90***	n. s.	4.90*
	13.10 (6.18)	14.48 (6.36)			

1) ***p<.001, **p<.01, *p<.05

2) 上段が日本、下段が北欧諸国である。

次に、キレやすい児童生徒の母子関係について母親への不満の視点から明らかにするために、キレやすさ得点を目的変数、母親への欲求不満得点を説明変数としてパス解析を行った。その結果、図2（日本）、図3（北欧）の通り、北欧諸国の児童生徒は、母親によって自分の自由が束縛されているという不満が高まるほど、すべての場面において、一貫してキレやすくなるという傾向が見られた。一方、日本の児童生徒は、母親の虐待傾向や自由束縛傾向に対する不満が強まると、友達に対してよりキレやすくなり、母親からの愛情不足に対する不満が強まると親や教師といった大人に対してよりキレやすいといったように、キレやすい児童生徒を生み出しやすい母子関係は国によって異なることが明らかになった。

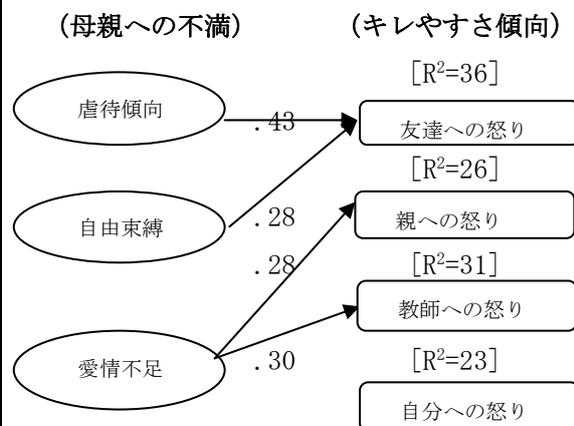


図2 パス解析結果（日本）

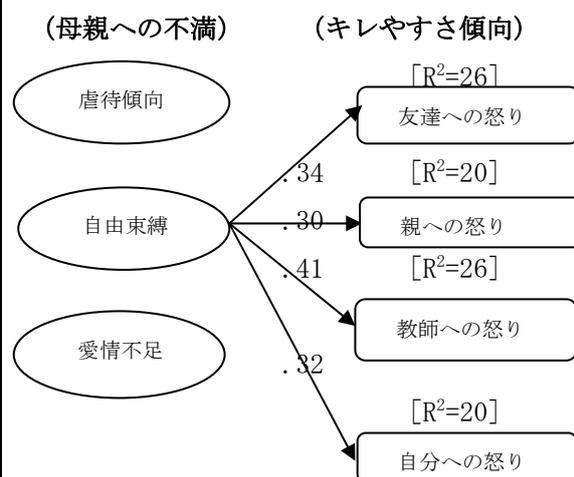


図3 パス解析結果（北欧）

(5) キレやすい母親の実態及び支援の在り方

子育て中における親のキレやすさ傾向を分析するために、項目分析及びプロマックス

回転による因子分析を繰り返し行ったところ、最終的に「子供の怠惰的態度」、「子供の反社会的問題行動」、「子供の声」、「子供の能力」という4つの下位尺度、30項目から成る「子育て怒り尺度」を開発した。なお、各下位尺度ごとのクロンバックの α 係数は、.76～.89、全体では.91であった。

次に、「母親版子育て怒り尺度」の各下位尺度得点及び全体得点を目的変数、家庭の状況や母親自身に関する10個の質問項目を説明変数として、数量化I類によってキレやすい母親を生み出す要因について検討した。表5に、各説明変数ごとのレンジの大きさ及びその順位のみ示す。

表5 キレやすい母親を生み出す要因
(数量化I類結果)

要因	怠惰的 態度	反社会 的行動	声	能力	全体
年齢	1.24	1.79③	1.54③	0.69②	0.89
仕事	1.40	3.27①	1.65②	0.56③	2.09
子供の数	4.19①	0.60	2.71①	0.24	7.27①
親との同居	1.79③	0.92	1.08	0.48④	2.06
親の養育態度	1.04	1.28⑤	1.31⑤	0.17	1.18
育児ストレス	1.07	0.55	0.40	0.42⑤	2.44⑤
夫のサポート	3.35②	1.77④	1.27	0.06	6.34②
子供のキレやすさ	0.54	0.19	0.69	0.28	0.06
幼少期の体罰経験	1.45⑤	1.04	1.36④	0.05	3.91④
育児サポート欲求	1.54④	2.98②	0.78	0.82①	5.87③
R ²	.28	.31	.33	.20	.30

表5の通り、最も母親のキレやすさ（全体）と関連が強かった要因は「子供の人数」で、子供の人数が多い母親ほどキレやすいことがわかった。次に関連が強かった要因は、「夫のサポート度」や「育児サポート欲求度」で、子育てに対する夫のサポートがない母親ほど、また誰かに子育て支援を求めている母親ほど、キレやすいことがわかった。なお、母親のキレやすさと子供のキレやすさの間には関連が見られなかった。

そこで、キレやすい母親が求めている支援形態について分析した。項目分析及び因子分析の結果、「情報収集欲求」、「相談欲求」、「子育て環境整備欲求」、「子育て代行欲求」という4つの下位尺度、計16項目から成る「母親版子育て支援欲求尺度」を開発した。そして、前述の「母親版子育て怒り尺度」及び「母親版子育て支援欲求尺度」を用いて両者の関連性について、パス解析によって検討したところ、図4の通り、キレやすい子供の大きな特徴の1つと考えられる「甲高い声」に対してキレやすい母親は、事態解決のために、特に多くの子育て支援を求める傾向の強いことがわかった。

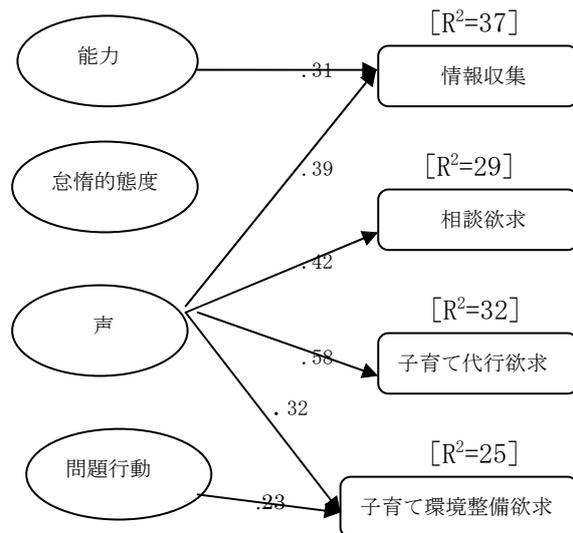


図4 母親のキレやすさと求めている子育て支援との関連性（パス解析）

次に、新たに開発した「児童生徒問題行動チェックリスト」（「学校不適応傾向」、「反抗傾向」、「暴力傾向」という3つの下位尺度、計20項目から成る）及び「母親版子育て問題対処行動尺度」（「相談」、「諦め」、「虐待的態度」、「育児環境改善行動」という4つの下位尺度、計16項目）を用いて、母親は、問題を抱えている児童生徒に対してどのような対応を取っているかについて、パス解析によって検討した。その結果を図5に示す。

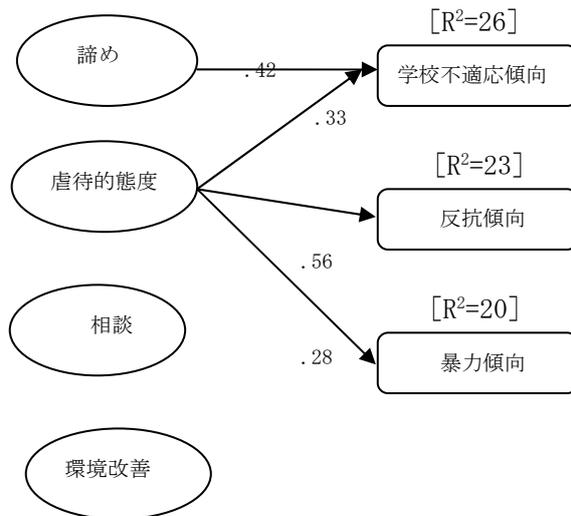


図5 問題行動傾向の見られる児童生徒への実際の対応（パス解析）

図5の通り、母親は、キレやすい児童生徒に対して実際には誰かに相談するのではなく、虐待的態度で接することによって問題解決を図ろうとする傾向の強いことがわかった。つまり、図4と図5から、母親は、キレやすい児童生徒の問題に対して誰かに相談したいと思っているにもかかわらず、実際には相談することもなく、日常的には虐待的態度で子どもに接することによって母親1人で問題解決に当たろうとする、孤独な母親の実態が浮き彫りになった。従って、今後は、キレやすい児童生徒への母親の虐待傾向をいかに減らし、外部の相談機関につなげていけるかが重要な課題であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 藤井義久、中学生における欲求不満とキレやすさとの関係—中学生版欲求不満尺度(FSS)の開発を通して、学校メンタルヘルス、査読有、10巻、2008、45-52
- ② 藤井義久、児童生徒のキレやすさ傾向に関する国際比較研究、学校メンタルヘルス、査読有、12巻、2009、59-68
- ③ 藤井義久、子育て中に怒りやすい母親の発見とその支援の在り方に関する研究、岩手県立大学共通教育センター紀要、査読有、4巻、2010、1-12
- ④ 藤井義久、怒り感情の発達、心理学評論、査読有、63巻、第1号、印刷中

〔学会発表〕（計6件）

- ① 藤井義久、心身の健康が怒り感情に及ぼす影響、日本健康心理学会第20回大会総会、2007年9月1日、早稲田大学国際会議場
- ② 藤井義久、キレやすい児童生徒に関する国際比較研究—日本と北欧諸国との比較、日本感情心理学会第16回大会、2008年5月18日、大妻女子大学
- ③ 藤井義久、Relationship between and frustrations of students in Japan, Sweden, Denmark and Finland, XXIX International Congress of Psychology, 2008年7月21日、Berlin(Germany)
- ④ 藤井義久、Frustration for mother and the tendency anger of the child、10th International Congress of Behavior Medicine, 2009年8月29日、立正大学
- ⑤ 藤井義久、母親に対する不満がキレやすさ傾向に及ぼす影響—日本と北欧諸国との児童生徒を対象にして、日本教育心理学会第50回大会、2008年10月12日、東京学芸大学
- ⑥ 藤井義久、児童生徒のキレやすさ傾向の発達的变化に関する研究、日本発達心理学会第21回大会、2009年3月27日、神戸国際会議場

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 義久 (FUJII YOSHIHISA)
岩手県立大学・共通教育センター・准教授
研究者番号：60305258

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし